

第五回井上靖記念館

青少年エッセーコンクール 高校生の部

井上靖ナカマドの会賞受賞作品



旭川永嶺高等学校一年 山田 颯 大

先生の名は失敗

突然だが、あなたの「先生」は、何人いるだろうか。たくさんいるという人や、もしかしたらいないという人もいるかも知れない。僕は、今まで出会った人全てが自分の先生だと思ふ。学校の先生はもちろん、育ててくれる親、近所の人、いつも一緒にいる友達だって先生だと思ふ。世の中は、たくさんのお話を教えてくれる「先生」で溢れている。しかし、「人間」だけが先生だとは限らないと僕は思う。

こんな経験をしたことがある。それは、中学校のときのフットサルの試合のことだ。中学校最後の大会、この試合に勝てば全国大会に出場できるという大一番。僕たちのチームは残り三分で、三対

〇で勝っていた。そんな状況になったら、ほとんどが「ああ、これは全国大会に出られるな」そう思うだろう。正直、僕も頭の中に同じ考えがあった。そのように頭の中が油断で侵食されていた僕は、その後、一気に四点を取られ、三対四で負けた。その時は、この結果が信じられなかった。なぜなら、三分前まで三対〇で勝っていて全国大会に行けたのだから。僕は、三分前の自分を恨んだ。恨みに恨んだ。僕は、この時知った。「油断」がどれだけ危ないもので怖いものかを。しかし、それと同時にその瞬間、僕は「油断しない」ことの大切さを学んだ。そう、この経験、あの三分前に

油断していた自分が「先生」になったのだ。その先生は、全国大会に出られないという悔しさと共に、生涯自分に残る大きな財産を僕に与えてくれた。僕は、あの油断していた自分を恨むことをやめた。いや、今では感謝してもしきれないくらいだ。

他にも、こんな経験がある。中学校の時の話だが、僕は勉強を怠けていた。勉強なんてテストの前だけにやって、いい点数を取ればいい高校に行けるのだから、普段はそんなにやらなくてもいいだろう、そう思っていた。予想通り、最初のテストは良い点数が取れた。この結果で満足した僕は、次も同じような点数が取れるだろう、そう思い込んだ。そして次のテストも勉強を最終日に詰め込むことにした。しかし、僕には悲劇が待っていた。その詰め込む予定だったテストの前日、僕は体調を崩してしまっただけ。無論、体調を崩してしまっただけ勉強などまともにできるはずもない。僕は、前回から大幅に点数を落とした。僕は、反省した。いや、反省したつもりだった。「喉元過ぎれば熱さを忘れる」このことわざ通り、僕はこう考えた。「前回体調を崩してしまっただけ、次は体調さえ崩さなければいいや」人間というのはこれだから恐ろしい。僕は、また最終日に

詰め込んで三回目のテストに挑んだ。しかし、もう最初ほど簡単ではなかった。そのまま僕は、撃沈。二回目と変わらぬ結果になってしまった。ここで、やっと今まで甘かった自分に気が付いた。「失敗は成功のもと」という言葉があるが、「成功は失敗のもと」にもなるということを知った。今までの「大丈夫だ」と思っていた油断が、やっと自分に教えてくれた。この出来事のお陰で、それまでのテスト勉強で詰め込んだ事よりも、もっと大きなものを学ばせてもらった。今まで自分の二つの体験には共通することがある。それはどちらも「失敗」からの学びだという事だ。失敗して得るものは成功したときよりもっと大きなものだと思ふ。失敗は、大先生なのだ。失敗という名の先生は、いつも僕たちを助けてくれる。時に厳しく僕たちを叱り、反省させてくれる。でも、そのお陰で成功という結果を残すことができるのだ。このように考えると、毎日の出来事が自分を創るという事が分かる。たった一つの忘れ物も、たった十分の寝坊も、客観的に見ると小さな事に思えるが、その一つのきっかけを心の中で意識するだけで、人は大きく変わる事ができるのだ。僕もこれから、一分一秒を大切に、成長していきたい。